

五穀豊穣



（収穫を祝って各地区で秋祭り）
みこしや獅子舞で、大地の恵みに感謝
 秋は本番、祭の季節。歓喜の笑みやほとぼる汗に胸は高鳴り、心は躍る。「松前の秋祭り」は10月13日から15日まで3日間、各地区で行われた。祭の音、色彩、カタチをカメラリポートする。



1_40年ぶりに大人みこしが復活（西高柳） 2_獅子舞の激しい動きに観客は魅了される（恵久美） 3_JA松山市永田出張所では、周辺の複数の地区が獅子舞を披露し合った 4_大きくて重たいみこしの鈴に興味深々 5_獅子舞を踊る子どもたちの表情は真剣そのもの 6_そろいの法被でみこしを担ぎ、笑顔があふれる（中川原） 7_それぞれの立ち寄り所で、みこしを担いで下ろし、担いでは下ろしを繰り返す大人みこし（神崎） 8_威勢のよい掛け声に合わせ、激しくぶつかり合う新立と本村のみこし



「チヨーサ、チヨーサ」
 さわやかな秋空の下に、威勢のよい掛け声が響き渡る。夫婦橋で2つのみこしが勢いよくぶつかる光景は勇壮だ。恍惚の表情や躍動感に胸は高鳴り、心は躍る。新立と本村、2地区が出合う「鉢合わせ」。魂が燃えに燃え、意地がぶつかり合う「男の闘い」は、見ている人たちを一気に祭のコアへと引き込んでいく。

松前の秋祭りは秋の風物詩。10月13日から15日までの3日間開かれた。期間中は▼提灯を手に行列を組む「高張り」▼みこしや獅子舞の運行などが行われ大勢の人々が秋を楽しんだ。

獅子舞の激しい動きは詰めた観客を釘付けに。その迫力に、泣き出す子さえいる。

古くから松前の人々は、豊かな幸に恵まれ、自然と共に暮らしてきた。森羅万象すべてに宿る神を敬い、自らの魂を見つめてきた。神々への「感謝」と「祈り」

は、人々の暮らしに欠かせないものだった。わたしたちが見る秋祭りには、今なおその精神が脈々と息づいている。豪華絢爛な屋台はまさに人々の舞台であり、主役は松前の人々の魂なのである。

祭の担い手たちの集中力は、祭が終わるまで途切れることを知らない。「地域の誇りを自分たちの体で表現したい」「子や孫にこの伝統を引き継ぎたい」という思いを確かなカタチとして感じることが出来る。だからこそ、見ている人までわれを忘れて夢中になれるのだろう。とことん楽しむことができるのだろう。

地域の祭は、その土地の風土や暮らしに根付いている。何百年もの間、祭をつないできたものは「地域愛」にほかならない。

秋祭りは、ずっと残したい、伝えたい松前の誇りだ。歓喜の笑みとほとぼる汗は、これからも人々を魅了するに違いない。